次なる飛躍

1

「ねえ、今度学校が買ったという小堤の土地、見にいかない？」
裁縫師範科の学生が友に誘いをかけた。
それに応じて、三、四人が連れ立って、件（くだん）の土地を見に行った。
朝日町から南西方向に数分ほど歩いたところ、そこには、辺り一帯の水田に囲まれた草ぼうぼうの広い土地があった。目の前には八幡神社と受頭院・浄閑寺といった寺社の境内に生い茂る樹々の森がこんもりと接していた。
「夜になったら、真っ暗で心細く、怖くて外出などはできません」
さすがのだいも、その辺鄙（へんぴ）さにそんな感想を洩らしたりしたのだが、しかし、生徒たちには、明日の夢を託す希望の土地だった。
「ここに真新しい校舎が建つのね…」
今の仮住まいの学校生活から決別する喜びの方が大きかった。
入学者が全国から馳せ参じるこの頃、安城女子職業学校は校舎の不足をかこち、高等小学校の校

舎を借りることでなんとか急場をしのいでいた。その校舎も、当初借用して教室に当てていた安城高等女学校が新校舎を竣工して不必要となったのを借りたものだった。

入学者の中には、狭い校庭に古びた校舎を眺め、これで勉強ができるのだろうかと不安を抱く者もある状態であった。

―この土地ではもう狭い。ここから羽ばたかなければ…。

こうした状況に、やがてだいは、校舎・施設面で根本的な解決を図ろうとした。

生徒も一定数確保できる見通しが立ち、学校経営の上でも自信を持つことができるようになった。この機をとらえて、だいは、さらに飛躍するために新天地を求めることを考えたのである。

家事の実習（大正後期）

2

人口が多く、交通の便がよく、文化水準が高く、将来の発展性も大きいところ…。といえば名古屋だ。だが、当時の名古屋は大正十（一九二一）年に周辺十六町村を編入して一挙に市域を拡大、その面積は東京市の二倍、人口は六十万を超え、東京、大阪に次ぐ全国第三位の大都市になっていた。そ

うした点、名古屋での教育展開は理想的ではあった。

だが、だいは隘路を感じた。名古屋にはすでに各種の学校が多くあって、進出の余地は少なかった。それに用地を取得するのも容易なことではなかったのだ。急速な市勢発展にともなって、名古屋の地価は過去四年間で二倍にも高騰してきていた。これでは、土地、建物、内装など初期に膨大な資金を要する学校設置はなかなか難しい。

「…となれば」

だいは、「県下第二の都市」である豊橋市に目をつけた。ここは、全国第二の生糸生産地として製糸業の工場が群立し、また第十五師団が駐屯して、〝糸と兵隊のまち〟として栄えている。一帯は軍の演習場として十分なスペースがとられるほど広い平野が開けている。

―ここなら発展の可能性は大きい。広い敷地が得られて、将来の十分な拡大も望める…。

心ひそかに抱く、次なる布石にも対応できると見ただいは、三蔵に意向を知らせて了解をとり、さっそく話を進めようとした。

その矢先、三蔵が思わぬことを告げた。

「小堤で三千坪、反当たり米五俵の年貢料で借り受けることができる。ここへ学校を移そう…」

「ええッ？…」

当時の寺部だい校長

思いもしない提案に、だいは一瞬絶句した。
聞けば、〝安城女子職業学校が豊橋に食指を…〟といった情報を聞き及んだ安城の町会議員たちの働きかけでそんな筋書きになったらしい。
だいは無論、豊橋移転を強く主張した。だが、我意を押し通し切れない理由があった。

3

豊橋に執着するだいに、三蔵は言う。
「豊橋へ移るといっても、資金はどう捻出するんだ」
学校の会計を担う三蔵の指摘は説得力があった。豊橋は何分安城からは遠隔の地であって、その移転に多額の費用を要するのが難点だった。
結局、三蔵の慎重論と資金の不十分なこと、また、安城町の有力者のあっ旋ということも考慮して、だいも我意を抑え、小堤に移転することにしたのだった。
豊橋進出―というだいの希望は、結局、実現を見なかった。だが、だいの豊橋進出の夢は消えなかった。
「三十数年来抱き続けていた豊橋への希望は、まだ捨ててはいません。適当な敷地さえあれば、現在私の夢に描いている、各種の学部を併せた大学と短大を中心とする、完備した女子総合学園を建

大正14年10月1日、収穫の終った直後の安城町小堤において新校舎建設のための地鎮祭繋が行なわれた

設して、国の文化に寄与したいと念願しております」

だいは後年、昭和三十七（一九六二）年、回顧の記録『おもいでぐさ』を記したが、その中で、はっきりその意志を表している。

歴史に〝イフ〟の仮説が許されるなら、想像の世界は大きく広がる。この時、豊橋への進出が実現していたなら、今ある学園は「安城学園」ではなく、あるいは「豊橋学園」であったかも知れない。そんな想像に駆らせるのも、歴史の歯車の狂いがなせるいたずらであろうか。

＊

ともあれ、安城女子職業学校は安城にとどまることになった。

建設工事は急がれた。斡旋（あっせん）の労をとった安城町長や町会議員など来賓十二名と、職員、生徒代表の参列のもと、新校舎建設の地鎮祭が行われたのは、大正十四（一九二五）年十月一日のこと。収穫の終わった直後で作地にはまだ稲株が残ったままの上での建設の槌（つち）入れだった。新築・移築の工事は突貫的に進められ、翌十五年三月には、新校舎で大正十四年度の卒業式を挙行。さらに九月までに教室、寄宿舎ともに整備が進み、移転はほぼ完了した。

4

小堤の新天地では、安城女子職業学校の校舎・施設と同時に、もう一つ、安城では珍しい施設が発足した。

大正十五（一九二六）年四月、附設幼稚園が開設されたのだ。

大正末期には農村不況が深刻さを加え、安城農林学校や安城高等女学校の公立校でさえ入学志願者が定員に満たないような状況に追い込まれていた。生徒確保の不安は安城女子職業学校ではなおさらだったが、その不安の中、幼稚園附設によって学校の財政を補完するのがねらいだった。

この時新たに定められた幼稚園令、幼稚園令施行規則によっていち早く開園したのは、だいの先見性によるものでもあった。

幼児のうち満三歳から学齢に達する以前のものを対象として、遊戯、唱歌、観察、談話、手芸等をもって保育する―この幼児教育は、安城でも画期的なものとして迎えられ、話題を呼んだ。

しかし、その歴史は長くは続かなかった。十年を経てようやく幼稚園としてその地歩を確立した昭和十一（一九三六）年、にわかに経営が成り立たなくなる事態に見舞われた。安城町が「安城保育園」を開設して、安城女子職業学校の附設幼稚園の入園児を吸収してしまったのだった。

「またまた安城町のなせる施政の〝犠牲〟となってしまったなあ」

昭和５年頃の幼稚園卒園記念写真

その嘆きは大きかった。

振り返れば、職業学校としてその経営がようやく軌道に乗り出した時、安城町の各小学校に実業補習学校が設置されたことで打撃を受け、次いでは、中等程度実業学校へ組織変更して前進の足がかりを固めると、女子の中等教育機関として町立の安城高等女学校を開設されるなど、安城町の教育行政は、いつも安城女子職業学校の後追いのかたちで、〝町立〟であることを強みに生徒を吸収して、民間校を窮地に陥れた。そうしたケースが三度起こったのだ。しかも、園児のほとんどを町内に頼る幼稚園の場合のダメージは決定的で、附設幼稚園は閉鎖のやむなきにいたった。

―安城唯一の幼児教育の場としての役割を果した。だが、安城町の幼児教育の分野において先鞭（せんべん）をつけたのだ。

安城女子職業学校は、その矜持（きょうじ）を誇りに、その後を過ごすことになった。だが、その教育への灯は戦後再び燃え上がるのである…。

5

だいが新天地での学園構築を進めたのは、校地狭隘（きょうあい）という現実問題の打開のほかに、ある宿望を抱いていたからだった。

―女子専門学校を設立しよう。

それは、他の目には〝野望〟とも映る高望みの願いであった。

その思いは、早くから沸々と胎動していたが、大正十四（一九二五）年四月、高等女学校卒業を入学資格とする高等師範科を設置したときにはっきり芽生えた。そして、小堤町での学校施設の充実と併行してその実現への模索が進められていった。しかし、実現までのその道のりは長く、険しかった。

まず身内の説得からかからねばならなかった。

「まだ二、三年、時期が早い…」

相談を受けた三蔵は、ブレーキをかけた。連年にわたる工事続きで資金に余裕はなく、財政上から考えても無理な話、理事長として慎重にならざるを得なかったのだ。

しかし、だいの専門学校設置の思いはやみがたく、文部省に出願の可否、認可見通しの打診に行った。そこで、文部行政の厚い壁を感ずることになった。

「安城に女専…？」

応対にあたった文部省の係官は、だいの申請希望を歯牙にもかけない態度だった。

「〈家事、裁縫を主とする〉女子専門学校は、官立、私立合わせても全国で九校しかない。しかも、どれも大都会にあって、町なんぞにあるところはない。特に安城といえば農業地帯。そんなところに女子専門学校を創っても第一、入学する学生は無いだろう」

中央では、安城町はつまるところ地方の一都邑に過ぎない。そんな地での専門学校の存在など全く論外のことだった。

「地方に専門学校は必要なし」

話を極めれば、文部省ではこういう結論なのである。

6

文部省の係官は話をまともに聞き入れてくれる様子もない。

だが、だいの持ち前の〝不撓不屈〟の気性がここで頭をもたげた。

―これで消沈しているわけにはいかない。

だいはこれに反駁した。

「農業と家事は関係ないとおっしゃられますが、むしろ密接な関係があります。農業が盛んな安城

のような土地にこそ専門教育が必要なんです」

だいは、これまで裁縫塾以来継続してきた教育方針を説明し、職業を身につけ自立する女性の育成をいかに努めてきたかを訴えて、係官の先入観の解きほぐしにかかった。

それでも、係官は話に乗らない。だいは、その後、何回も上京して説得を続けることになった。

この執拗なまでの説き伏せに、ついに係官も折れた。

「そうまで言うのであれば、専門教育に農業を加味する種類のものを計画しなさい。それなら専門学校として設置を認めることを考えてもいい」

こんな示唆が与えられて、ようやく出願が認められた。

だいにまた新たな課題ができた。

こと、裁縫・家事に関してなら〝自家籠中〟のことと言えるが、農業と関連させての教科を構成するとなると、誰か農業分野に詳しい人物の力を借りなければならない。

だいは、色々思案した。その末、農業界の大人物に視点を合わせた。

―山崎先生の力を仰ぐしかない…。

安城女子職業学校でのミシン実習

だいが着目した山崎延吉は、日本近代の農政家・教育者として知られていた。

明治三十四（一九〇一）年、愛知県立農林学校（現愛知県立安城農林高等学校）の初代校長となって同校を全国三大農学校の一つに育て上げ、大正九（一九二〇）年に校長を退職すると、全国の農村を巡って、組合を創って資金を融通し合ったり出荷・購入を共同で行ったりすることを勧めるなど、「農業経営の改革」を説き農業経営の在り方について指導した。また〝多角型農業〟を提唱して農業改善に力を尽くし、特に安城市一帯を後年「日本デンマーク」と呼ばれるほどの農業先進地に仕立てた功績が大きく認められていた。